痴呆性高齢者グループホームにおける生活の展開に関する研究
- 4つのホームにおける調査を通して -

石井研究室　　月本　幸　　安田　紋子

1．研究の背景と目的

本研究では、施設形態の類似した３つのグループホーム（以下、ＧＨと略）と、それらとはタイプの異なるＧＨ１つを対象として、計４つのＧＨの生活を構成している諸要素を把握し、それらと生活展開の関わりを探ると共に、ＧＨの生活空間やケアのあり方を考える上での基礎的な知見を得ることを目的としている。

2．調査の方法

調査は、ホーム側が選定した日常生活がほぼ平均的な各２日間において、居場所・行為等の観察記録を主体とした10分間隔のマップ調査(7:30-19:00)による。また、あわせて入居者の基本属性に関して職員へ調査票の記入を依頼した。

3．調査施設の概要と入居者の特性

表－１に各ＧＨの概要を示すが、大きな特徴としてＴ・Ｙ・Ｈホームは宮城県内に立地し、平屋建ての構造となっているのに対し、Ｓホームは比較的都会部に立地しＧＨがビルの５階に入っているという点が挙げられる。

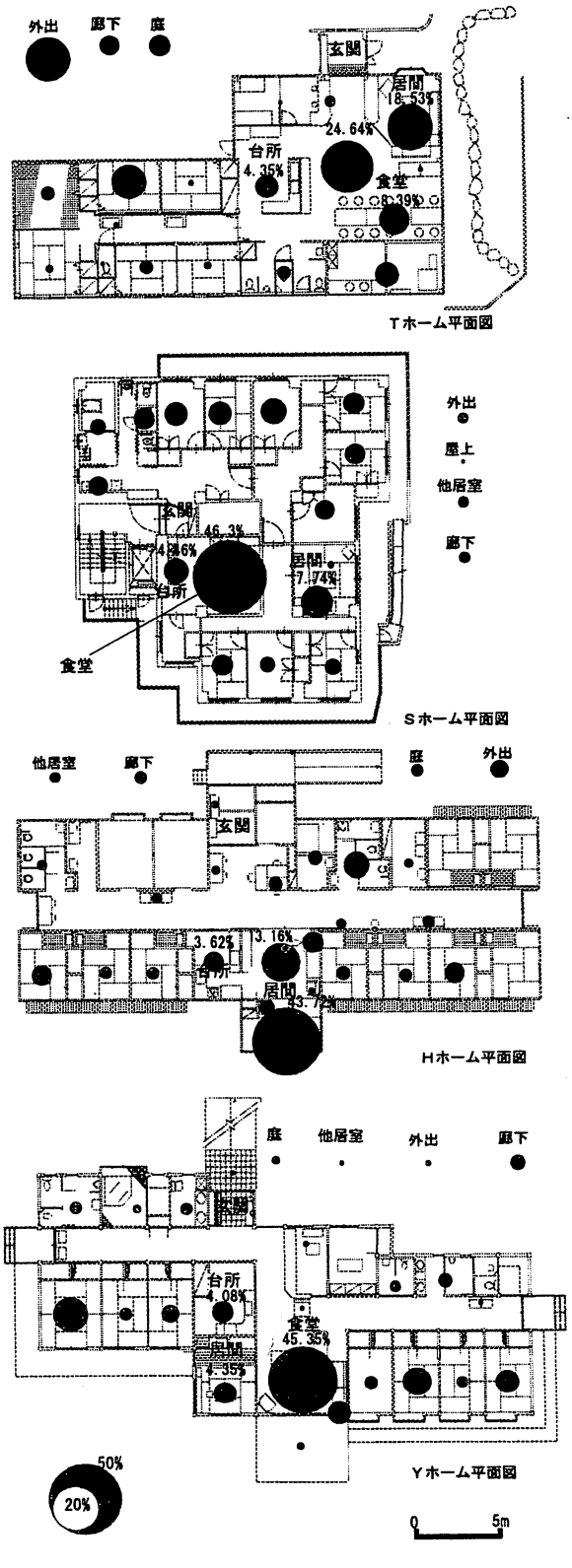
平面構成をみると、Ｔホームは中廊下型の構成で端部に食堂・居間等の共用空間がつながっている形態であり、廊下にもソファーが置かれている。ＹホームとＨホームは中央に共用空間が設けられ、両翼に中廊下型の居室が広がっている形態である。Ｓホームは一部の居室が共用空間を取り囲む形となっている。

各ホームの入居者の特徴としては、T,H,Sホームでは痴呆が中程度の入居者が中心となっているが、Ｙホームでは比較的軽度と重度の入居者が混在している。

表－1　調査対象ホームの概要・入居者の属性

	Tホーム	Yホーム	Hホーム	Sホーム
所在地	宮城県大和町	宮城県丸森町	宮城県石巻町	神奈川県横浜市
運営主体	社会福祉法人	社会福祉法人	社会福祉法人	株式会社
開設年月	1998.1	1999.3	2001.3	2001.8
調査対象人数/定員	7/8+デイ3~5	8/8	6/9	9/9
男性人数	0/7	1/8	2/6	1/9
平均年齢	82.0歳	84.4歳	81.7歳	80.9歳
痴呆程度別人数(注1)	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ 1 1 4 0 1	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ 2 2 0 4 0	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ 1 0 4 1 0	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ 0 1 6 2 0
施設形態	デイサービス一体型	特養併設型	デイサービス併設型	独立型
建築形態	平屋	平屋	平屋	ビル内5階
建物面積／1人あたり	242.5㎡/30.3㎡	275.7㎡/34.5㎡	299.7㎡/33.3㎡	253.6㎡/28.2㎡
調査時介護スタッフ数	5(調理スタッフ1)	5	3	2~3
調査年月日(天候)	01.10.24・26(晴)	01.11.13・14(晴)	01.11.20・21(晴)	01.11.8(晴/曇)・9(雨)

(注1) 左から右に行く従って重度



図－1　調査対象ホームの平面図と空間別の利用割合

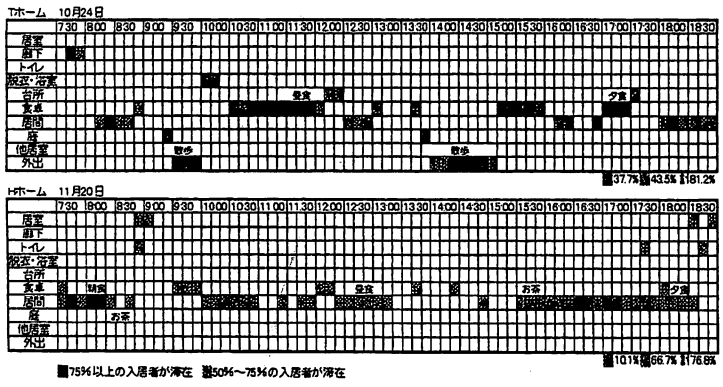


図-2　二事例に見る入居者の生活展開

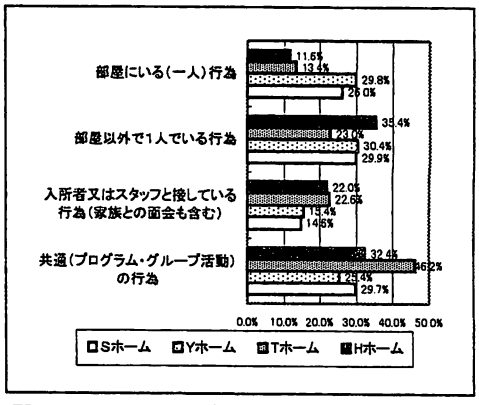


図-3　ホーム・入居者別に見た各行為の割合

4．調査結果と考察

4-1．各グループホームの生活展開

4つのＧＨから、入居者の生活展開の傾向が異なるＧＨを図２に示す。Ｔホーム（図２上）はホーム主導のプログラム活動に伴い（図３）空間と行為を共有している割合が高い。一方、Ｈホーム（図２下）は共用空間での生活は居間がその中心となっているものの、個別的な生活展開が軸となっており共用空間でも一人でいる行為が多い（図３）。

4-2．空間利用の特徴

各ホーム別に見ると、食卓における滞在割合が高く、生活の中心となっていることがわかる（図1）。このほか、Ｔホームでは、散歩という行為が毎日の生活においてプログラムとして実施されているため、外出の割合が高い。

4-3．他者との関わりの特徴

Ｔホームは、日中デイサービスの人も含めほとんどの入居者が食堂・居間で過ごしており、生活行為自体もグループ活動的なものが多くを占め、他者と関わり合いを持っている。また、洗濯物干し・取り込み等は入居者が自発的に行なっており、食事前後の家事行為はほぼ全員が参加し分担が決まっている。

Ｙホームでは、スタッフが会話や行為を誘導することが多く、入居者間の直接的な関わり合いは特定の人同士を除いては比較的少ない。

Ｈホームは、入居者とスタッフとの直接的な関わり合いの頻度は比較的高い（観察総頻度に対し75.4%）が、場を共有して過ごしていても入居者間の関わりは少ない。

Ｓホームでは、入居者同士がお茶・食事の前後に食堂で談話する場面は見られたが、一人一人がスタッフと関わり合いを持った頻度は他のホームに比べて少ない（観察総頻度に対し58.0%）。

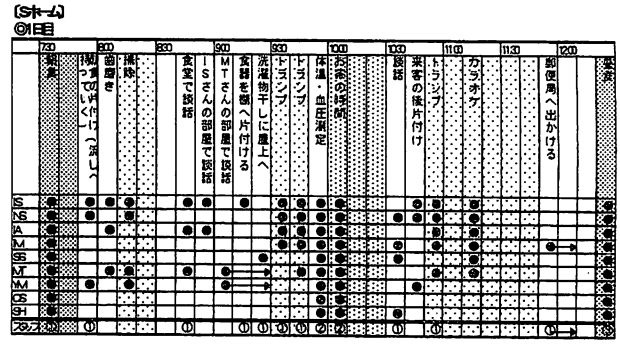


図-4　Ｓホームにおける生活展開と各入居者の関わりの事例

4-4．会話の内容からみた分析

観察調査から見られた会話の様態、その内容から見ると、Ｓホームの姉妹間の関係を除いては特定の入居者間に親密な関係は見られなかった。多くは、スタッフからの誘導に伴う会話や、行われる行為・出来事をきっかけとして側にいる人との間に生まれる会話が主であった。

5．まとめ

今回対象の４ホームは空間的な相異が少ないこともあり外部との関わりを除いては空間利用に大きな差異は見られなかった。一方で、生活展開は各ホームで相異が見られた。特に、ホームの生活の軸をスタッフが作るのか、入居者の個別性に多くをゆだねるのか、またどのように入居者と関わりあいを持つかなど、ケアのあり方によっても生活展開が異なってくる。

入居者間の関係形成などからは、特定の人との結びつきというよりは、場面場面での状況の中で作られる関係性が多くを占めていることも明らかになった。